

---

# 神がここにいる

小田 浩正

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神がここにいる

### 【Nコード】

N0305BA

### 【作者名】

小田 浩正

### 【あらすじ】

僕が昨日から困っていることと言えば、

明日が来ないことである。

…えっと、「はやくあしたがこないかなあ〜」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのでしょ…。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸

のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまつて、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかった。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかった。

神様その他もろもろ出てくるハチャメチャなストーリーが始まります。

そして、『電車内は人の心』もよろしくお願いします。

## プロローグ（前書き）

この作品、結構面倒です。

神様やその他もろもろ出てきます。

ハチャメチャなストーリーが始まります。

どうかよろしく願います。

あと、感想もよろしく願います。

## ブローグ

僕が昨日から困っていることと言えば、

明日が来ないことである。

…えっと、「はやくあしたがこないかなあ…」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないので…。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまつて、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかった。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかった。

「きやあああつあああつあああああああああああああああ！」

いきなりですみません。ちょっとヤバい事態が僕の目の前で起きていたので。

僕の叫びを聞いてしまった近所の方。ホント、すみません！

僕の部屋の壁は意外と薄いので、外からの騒音が良く入ってくるのです。なので逆に僕の叫び声も近所に響いてしまうのです…たぶん女の子の叫び声ならいいのですが、実際は、高音を喉から無理やり出そうとしているので、聞いてしまった方々は朝から不快にしまつたでしょう。ホント、すみません…。

## 第1話 第1章（前書き）

最初からぶっ飛ばします！

感想よろしくっ！！

## 第1話 第1章

さて、状況を説明します。

昨日、僕にとつて今まで生きてきた人生の中で、一番の試練に会ってしまいました。そのため僕は、今までにない疲れを感じ、そのままベッドで寝てしまいました。なので、寝巻を着てない。風呂にも入ってない。もうそろそろ、秋だというのに、昨日の夜は残暑なのか、暑かった。

すこし汗を書いているのか、体にシャツが張り付いて気持ち悪い。

「風呂に入ろうかな」

ちよつとずつ鈍い僕の頭がゆっくりですが動き始める。

さっきの叫び声の前あたりに戻りますが、あることに気づいたので。寝ていたはずのベッドから、落ちているのです。近くに最近買ったマンガも落ちている。元々、寝像は悪い方なので自分でベッドから落ちてしまったのではないかと、考えて目をこする。

窓のカーテンからさす日差しに、まぶしさを感じながら、ベッドの上を見たのです。このままの展開ならば…

窓からさす光を浴びて、神々しい姿で寝息(?)しているかわいらしい女の子が、すやすや寝ている

という具合だと思います。

しかし、僕のベッドに寝ているのは…。

「なにやってんだよ！そんなところで お ば さ ん が寝てんなんて！」

そこにいたのは、だいぶ張りのなくなった頬、唇は不健康さが目立つ感じのすこし紫色に近い。完全なるおばさんがそこにいた。

「……んっ。どう……したの……？朝から……うるさいっ」

僕の悲鳴と怒声で起こしてしまったのか、少し伸びをしてこちらを見た。声がかすれている。絶対寝不足だろと思うぐらいまぶたが重そうである。

「目が覚めたか？そんなじゃあ、ゴーアウト！」

「……？横文字は弱いんだぞ？」

「わかったから……日本語で言い直すから……」

イラついてしまう。不愉快だ。朝からすぐに血圧が急上昇というのは、若くても危ない。

「……うん、早く言つてよ。眠いんだけど……」

「早く！出ていけ！」

「……？」

「『？』じゃあないっ！」

「イミガワカラナイヨ？」

なぜカタカナ？

「お前……ケンカ売ってんのか？」

さて、どうしてやろうか。1日3食抜きにしてやろうか

「……プスウ……」

こ、こいつ、布団に潜り込みやがった！

「無視したっ！寝やがったっ！」

「ムシ〜ムシ〜ムシ〜ムシ〜」

「ちよ、ちよっとおい！き、気色悪いから！やめろって……」

「……うん……」

理解を得られたようだ。それと言わなければならないことが……

「お前さあ、今顔がヤバいぞ……」

「え？……か、顔？か、鏡は？」

周りを見回し始めたので、近くにあった手鏡を渡す。

「ゲッ！」

やっと気づいたらしい。

ここで一応言っておくが、今まで僕が話していたのはおばさんであ



る。女の子ではないぞ！そこをご理解いただきたい。

「イヤッ！　なんで早く言わないの！」

色々ゴタゴタしていたから言う暇がなかった。早く言えば良かったかもしれない。なぜなら…

「うん！これで大丈夫だよ！私もピッチピチの〜」

「…幼女ね……」

一回後ろを見て少しぶつぶつ何かとなえたあと、ちゃんと昨日通りの顔に戻った。

「さて、これで君をイチコロにできるよ〜」

まさかあゝ。僕はこんな奴には欲情がわかないんだよ！この世の『ロリータ』なるものには興味がない！

「イチコロにするんだったら女の子じゃなくて、オンナになりなよ…」

「うっ…」

「でさあ〜」

彼女の顔のことが本題ではない。僕が問い詰めたいのが

「なんで僕のベッドで寝ているのかなあ？」

そう、忘れてはいけない！今も僕は冷たい床の上にいる。話している最中、彼女が上から僕を見下していたのだ。全くイライラして仕方なかった。

「だってさあ。まだこの家に来て1日目の寝る場所がリビングのソファで寝させるなんて、いったい君は何さまなんだ！？」

「お前の方が何さまだっつうの！　ここは僕の家で！　僕の部屋で！　僕のベッドなんだぞ！」

「それが？」

プチッ……キレたぞ！

「そこにいる化けたおばさんが僕の部屋にいる理由など、ないっ！」  
一息ついて

「そしてお前とあと1週間過ごさなければならいなんてごめんだっ！」

「それは、きのうはなしたでしょ？」

ああわかつているとも。そうしなければならい理由は彼女にはあるが僕にはないのだよ！

「それに僕はおばさんとも、幼女とも同棲したくないんだよ！きれいな『お姉さん』かもしくは『美少女』かだ！」

「そ、そんなあゝ」

「わかったか！ 僕はお前が持ち込んだ厄介事を今すぐお前というしよに、捨てたくて仕方ないんだよ！」

「ね、ねえゝそんなことまで言わなくてもいいんじゃないかなあ？」

「僕にはこれほど言いたいことがあつたんだよ。昨日言わせなかつたお前が悪い！」

さてどう落としてやるうか？

「で、でもね？お父様の言うとおりじゃなきゃいけないんだよ？それだけは……わかつてくれる？」

こいつのお父様とやらの話をされた。だから、これに対してはこいつの言うとおりでないと僕の命が危うい。

「そんじゃあゝさあ……何か僕に利益でもあるの？」

「うんうん！ それはこれからの君次第だよ！」

……ハッ？

「頑張れば、君の未来は切り開くことができる！」

「……」

「君とならできるんだよ！ 君じゃなきゃむりだよ！」

こいつ、頬を赤らめながら叫んでいるところがかわいいんだけど、実際にはおばさんだから、少し残念な気持ちにされてしまう。

「まあ期待しといていいんだよな？」

「そうだよ。期待しといたほうが絶対いいよ！」

しかし、これからなんだよな。あと一週間耐えられるかわからない。「さて、僕らがやらなければならいこととかは、昨日言われたこ

とだけなのか？」

「うんそうだよ。それで、私にもちゃんと能力があるから大丈夫。なんとか君を助けるぐらいは出来ると思うよ」

「その自信はどこから？」

「元々、保証できるものだから自信があるんだよ！」

「いや、だからそれがどこからなのかって言ってるの」

「？　だって神様だから！」

そう、こいつは神様の修行者。

会ったときにそう言われた。堂々とね。

「……うん。わかったよ」

僕は彼女に笑顔を向けてあげる。内心、憐れんでいます。

「そうでしょ。私のことを信じていれば、君は死なない」

恐ろしいことを言う。だがこれは脅迫などではない。実際にあったから。

昨日は危なかった。危なかったというより、死にかけ、死んだ。だが、こいつの能力で助かったのかは知らない。

「あ、すっかり忘れてた」

変なこと思い出してしまった。昨日のことを回想していたら、今一番気にしてなくてはならないことを思い出した。

「今、何時？」

「エット…私二八人間デ言う時間トイウモノガ理解不能デシテ…」  
絶対わかってるよ、こいつ。

「…早く」

「は、はい！」

2人で時計を探し始める。

いつもはベッドの近くに置いてあるのだが、昨日は時計をセットしなかったためどこにあるのかわからない。

「あっ！ あったよ」

「何時だっ！」

「午前八時前です」

「ノオオオオ！」

今日は学校なのだ。それも週のと真ん中。自分が起きた時間が把握していない僕がいけないのだが、いままでとは全く関係がなかったことに関わり始めてしまったため、何もかも狂い始めているのかもしれない。

「ど、どうしたの？」

「学校なんだよ！ 僕たち学生は勉強に励まなければならないんだよ！」

自分で言ってるのもなんだが、あまり授業には集中したことがない。

「ちよつと、や、ヤバ！」

「く？ ホント大丈夫？」

「制服！ 制服はどこだよ！」

おいおい。この時間にはもう学校に向かってなきゃ間に合わなくなる。昨日のようにはなりたくない！

「このことか？」

「おいっ！ なんでお前が踏んでんだよ！」

さて、どうするか？ 親が特殊だから弁当は毎日僕が作っている。なので、どこかしらで弁当を買わなくてはならない。すべて昨日と同じことをしてしまっている。

また、僕は大変な目に会ってしまうのかもしれない。

なんか、ゴタゴタ騒ぎで済みませんが、一応説明します。

僕のベッドの上にいるのは、幼女 に化けた僕より長く生きている神様の修行者らしい。そして、昨日から居候し始めた。僕はこんな日々を過ごさなければならぬ。

どうしてこうなったのかは、一回僕の主観の昨日というより、周りの人々を主観とした昨日から説明をしなくてはならなくなってしまう。

それでは、僕とおばさんの出会いをなるべく短くお話ししましょう。たぶん短くはならないけど。なるべく短くします！なるべく…。

では昨日の回想を始めます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0305ba/>

---

神がここにいる

2011年12月31日19時52分発行